四月の園藝

東京女子高師教授　有川ひさゑ

暑さも寒さも彼岸まで、此處まで漕ぎつけると人も、草も、蟲も、やつと呼吸がつけるやうになる。さうしてめい〳〵、忙しくなつて來る。三月末から今月にかけては、仕事が多い。

一、草花や蔬菜の種蒔き。
一、宿根草花の株分又植付。
一、ダリア・カンナ等夏咲球根草花の植付。

前回に説明

球根物は第一土地を充分に深く耕起する事が肝要である。此處に油粕・米糠等の原肥を入れよく混せ合せて、球の高さの二倍位、土のかかる深さに植える。

一、秋播いた草花例へば美人草・矢車菊・バンヂー等を苗場より夫れ夫れ花壇に植え出す。

花壇には兼ねて堆肥・落葉の類を敷き込んで置いて、此處に花の色どりや、草の高さ等を考へ意匠もあり、眺むるにも便利なやうに配置すべきである。

一、芝の植付。

芝生をつくるなり、花壇の縁に付けるなり何れにしても今月頃から梅雨までの間が、時節である。高麗芝がよいが、運賃こめて、十錢で買へる。矢張時節の間が、芝の價も安い二三倍には廣げられるから、二三坪の芝生になら一坪買へば澤山である。

土地を耕起して、地面を中高にするか、或は一方に傾斜するやうに均らして、配水の便を計り、此處に、短ざく形の芝片を、隙間を置いて併べるなり、或は二倍にでも、三倍にでも眞綿を引き伸すやうに廣げてもよい。次に芝の根がしつくり土に着くやうに、板でおさへて、上から土篩で、土を芝がかくれる位にふりかけ、當分は人のはいらぬやうに周りに繩張りでもして置く。

手入れとしては春秋二回位、刈込をしたり、肥料を施す位で、肥料は、硫酸アンモニアのやうな無臭の肥料を稀く溶して、むらなく一面にかけるとよい。他のものとちがひ、不潔の肥料では一寸困る。最も手の入ることは、芝の中に絶えず頭を出す雑草を抜くことである。併し二三年辛棒して除ると、其の方が勝つて、雑草のはびこる餘地がなくなる。ところがあべこべに、雑草の方が勢力を得かけたらとりかへしはつかぬ。

おてだまを遊ぶにも、角力をとるにも、恩物を併べるにも、お辨當をつかふにも、この天然の緑毛氈にまさつたよい場所が他にあらうか。それに周りに花壇でもあつて、小蝶のヒラ〳〵する頃などは一しほであらう。

芝を刈つたり、雑草をぬいたりの平常の手入れも、決しておつくうのことではない。

草をぬくには小さな竹篦を、芝を刈るには鋏を與へて、座つてなり、寝ころんでなり、思ひ思ひに、一寸でも、二寸でも、めいめいの手に世話をさせてゆくならば、これが、子供にとりて、たのしみの多い、ふさはしい仕事にも遊びにもなる。且つ自分が丹精したものと思へば、靴で踏みにじるとか、棒で堀りかへすとかのいたずらも、する者は見えぬであらう。

一、牡丹●芍藥●桔梗●ヲダマキ等宿根物の手入れ。

今月になるとずつと芽が伸びて來るから、株周りの土を軟くして、肥料を施し、更に株際に土をかけてやるもよい。花が咲く迄に二三回も同樣の注意をしたい。

又薔薇のやうに枝の伸びるものは、長すぎる枝を剪り透かせたり、育ちの弱い、見込みのない枝を間引いたり等の仕事も必要である。

一、害蟲驅除

草が軟い若芽を出しかけると、蟲は殻を破つて御馳走めがけてたかつて來る。殊に蛞蝓は新芽だの蕾だのゝ、大事のところをえらんでつきたがる。しかも蕃殖が早くて、一日もうつかり出來ぬ。屑つた石鹸を三指で一つまみほどを湯呑五分位に溶かし、これに、のみとり粉を小匙一杯もいれて混ぜ、數時間置いてこれを筆にでもつけて洗ひとるとよい、蟲の死にがらも殘さぬやうに。